

# 秋の散歩道

asitaba@ねこ

僕はあても無く歩いていた。

気がつけば夜だ。

確か、家を出たのがお昼ごろであったから、ずいぶんな時間歩いていたことになる。

本当に知らない場所まで来ていることには、自分でもびっくりしている。

ここへ来るまでの間、誰かに迷惑をかけなかつたらうか。

肩がぶつかったり、車道へ飛び出たりしなかつたらうか。

今まで自分のことでいっぱいだったくせに、人の心配ばかりをしている。

近くに知りあいがいるとは思えない。

家の近所をぶらつく程度のもりだったために、金銭類は一切持っていない。

今来た道に戻ろうにも、ここには街灯も立っていない。

辺り一面暗闇である。

幸い、体力の限界はまだ遠そうなので歩けはする。

だが、この道を歩いて行くのはどうも危険だ。

ここで一夜を明かすのも一案である。

動くのはあきらめてその場に横たわると、空にはいくつもの星が輝いていた。

人気もなく、風の音が響くだけ……あとは、虫が少し鬱陶しいだけだ。

僕は初めて地球が回っているのを感じた。

朝になり、昨日歩いてきたであろう道をたどっていく。

途中向かいから人の来るのが見えたので、いつものように俯き加減で歩いていた。

「帰るのかい？」

思わぬことが起きたので、一瞬戸惑った。

「……あ、はい」

「そうか、気をつけて行きなさいね」

「あの、ここまっすぐ行ったら、駅か何かに着きますか？」

「すぐそばにバス停があるよ。私もそれに乗ってきたんだ。駅もバスに乗ったらすぐ着くよ」

「歩いたらどれくらいでしょうか」

「歩いたら、それは大変だからバスで行きなさい」

そうしたいのは山々だが、小銭すら持っていないので無理なのだ。

「今、お金が、ちょっと持ち合わせてないので……」

「お金持たないでここまで来たのかい？ もしかして、歩いてきたの？ うーん。どこまで行くの？」

「あの、多分、駅まで行けたらあとは多分、歩いて行けるので」

線路をたどっていけば、などと考えていると

「……ほら、少ないけど」

これ持って行きなさい、と五千円札を手渡された。

「あ、いいえ、そんな、ここまっすぐ行ったらいいですよ？ 大丈夫ですよ」

「あなた、孫にそっくりでね、放っておけないよ。いいから持っておきなさい大丈夫だから」

しわしわとした手で差し出す五千円札。

僕を見上げる顔は笑っていた。

あまりの嬉しさに泣いてしまうところだった。

「ありがとうございます。」

「気をつけて帰りなさいね」

僕は軽い会釈をして、その場を去った。

しかし、通りすがっただけの人にここまでしてくれるとは、なんと親切なのだろう。しばらくしてから思ったのだが、お金を借りたのなら連絡先くらい聞いておくべきだった。振り向いてみたが、すでにおばあさんの姿は見えなくなっていた。

言われた通りに歩いているとバス停が見えてきた。駅へ向かうバスはあと一本。色々あったが、間に合ってよかった。バスが到着するまでの間、空を眺めていたらトンボが飛んでいた。まるで夏なんてなかったかのように、カラリとした空気が辺りに広がる。もしかしたら、あのトンボが秋を運んできてくれたのかも知れない。

日が傾き始めたころ、木が生い茂る中にある一本の道を抜けて小柄なバスがやってきた。ガタンとドアが開き、中へ入る。客人はスラリとした女性が一人乗っているだけだった。僕が座席に座ったのを合図にドアが閉まり、バスは発進した。駅に着くまでの間、何度かバス停へ止まった。近くに川があるのだろう、釣り人のかっこうをしたおじさんが二、三人乗ってくるだけだった。

「終点です。お忘れ物のないよう、お降りの前にご確認ください」

それを聞いて座席を立ち、シャツのポケットから折りたたんだ五千円札を広げる。運転手さんに渡すと笑顔でこう言われた。

「……見ない顔だね、行きのバスでも見なかったな」

「あ、はい、あの、歩いて行ったんで……」

「歩いてあんなところまで行ったのか！ これは驚いたな。今度来るときはバス乗って行きな」

はい、と返事をし、数枚のお札と、大量の小銭を受け取った。バスを降りると昨日同様、辺りは真っ暗であった。

あれから無事に家へ帰る事が出来たのだが、未だどういう道を通って行ったのかは思い出せていない。